

事件から何を得るか

法律事務所職員 坂崎 恵美子

第一子が1歳半、第二子の妊娠が判明してまもなくの頃、事件が発覚し、私の勤務する事務所は騒然とし、日本中が大騒ぎになった。

当時、全国ニュースとなったショッキングな事件だった。加害者の1人とされた少年の弁護を、わが事務所の弁護士が担当した。

◇◇◇ 自分にできることは何か

その時、私は待望の女の子を出産して1年半。親にとって子どもとは、この上なく愛しく、自分自身より大事な存在であることを悟ったばかりの時であった。

被害者の親の心痛、加害者の親の苦悩、計り知れない当事者の心の痛みは、他人事とは思えなかった。

事務職員として、弁護士の仕事を補佐することの他に、自分がすべきことは何だろう。この事件は、そういうことを考えずにはいられない事件だった。

◇◇◇ 被害者にも加害者にもならないために

被害者の死を無駄にしないために、私自身がしなければいけないこととはなんだろう。

少年事件ということから、自分の子育てと重なり、どう子育てしていけばいいのだろうと、思い悩んだ。怖かったのだ。

考えていくうちに、被害者にも加害者にもならないためには、自分の子どもだけを、育てるだけではいけない、と思うようになった。

そして、私自身の生活の中でできることは、保育園や学童保育などの父母会活動だった。そこで、親たちみんな、みんなの子どもと一緒に育てる関係作りに力を注いできた。

◇◇◇ あれから 15年

今、娘は高校2年生と中学3年生になった。あの時の被害者と同じ年頃だ。

子育てがひと段落したので、家族と相談し、里親を引き受けることにした。子ども達も協力してくれると言ってくれた（今のところ…）。私にとって子育てが一番自分自身を成長させてくれたということが大きな理由だ。

また、以前、神戸の少年事件の付添人弁護士の講演を聞いた。その弁護士は、保護司もされているそうで、子どもたちの社会復帰に尽力されていることを知り、とても感動した。里親なら私にもできるかもしれない。そう思ったのもきっかけのひとつだ。

今は研修期間で、実際にはまだ子どもを預かっていない。

自信はない。仕事との両立も不安だ。

でも、私の中で、あの被害者は生きている。だから、頑張って挑戦していこうと思う。

◇◇◇ どう生きるかが問われている

この仕事に就こうと決めたのは中学3年の時だった。夢がかなって、勤続24年半もたってしまった。

法律事務所で働いてきた中で、数々の事件に触れてきた。その度に考えさせられる。

『自分がどう生きるかが問われている』ということ。